

国立国語研究所学術情報リポジトリ

学術論文における問題提起疑問文とそれに対する答え方

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2020-03-18 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002706

学術論文における問題提起疑問文とそれに対する答え方

清水まさ子 (独) 国際交流基金日本語国際センター)

1. はじめに

論文やレポートを書く際には、「なぜOOは発生しなかったのだろうか」や「OOは果たして影響しているのだろうか」といった問題提起の機能を持つ疑問文(以下、問題提起疑問文と呼ぶ)を用いることがある。論文の書き方参考書でも問題提起疑問文が紹介されているが、その多くは問題提起疑問文そのものだけを紹介しており、提起された問題がどのように答えられているかまでは記述されていない。

そこで本論文では、学術論文中で提起された問題に対して、どのように答えが出されているのかということも含めた問題提起疑問文の用法について考察する。

2. 先行研究

2. 1. 本研究における問題提起疑問文とは何か

疑問文とは終助詞「か」で終わる文(例:雨が降っていますか。),および「か」は用いられていないが、文意を変えることなく「か」を補える文(例:雨がふっている?)を指す(田野村1988, p123)。本研究は学術論文を対象にしているため、前者の疑問文、つまり終助詞「か」を伴う疑問文を調査対象とする。

同じ終助詞「か」をもつ疑問文でも、その疑問文が表す機能は異なる。宮崎他(2002)では、疑問文の機能を<質問>と<疑い>に分けた。まず、質問の機能から見てみる。

(1)A: 誰がここに来ましたか?

B: Cさんです。

(1)は「誰」が来たかという情報が抜けている状態のAがBに対して情報を求めている場面である。このように、「聞き手から情報を引き出そうとする機能」を<質問>と呼んでいる。(同上, p175) また次のような疑問文もこの<質問>の機能を有していると言われる。

(2)A: 今日、彼来るかな。

B: 来るんじゃない?

傍線部は「来るのではないか」という文が口語体になった文であるが、これは「来る」という肯定への答えを含んでいる。(2)のような疑問文を安達(1999)は「傾き」をもつ疑問文と呼んだ。「傾き」をもつ疑問文も、<質問>の機能の一つだとされる(宮崎他2002, p181-182)。

次に<疑い>の機能にうつる。<疑い>は、<質問>機能とは異なり、相手に対して問いかけで答えを出そうとせず、相手が存在しない状況や話し手自身の「独話的な環境」(宮崎2005, p184)で用いられているという。論理的なテキストでは、この<疑い>の機能の独話的な用法である<思考過程>や<疑念>から派生した<問題提起>機能が用いられているという(同上, p197-198)。

次の(3)のような例である。

(3) 今まで、納豆の歴史に関して述べてきた。それでは、納豆はこれからどのように発展していくだろうか。ここでは、納豆の将来について考えてみたい。

以上みてきたように、疑問文には<質問>と<疑い>の機能があるが、本調査で問題提起疑問文と呼ぶ文は、上記で述べた疑問文の機能のうち、<疑い>機能の中の<問題提起機能>を持つ文を指す。

2.2. 問題提起疑問文に関する先行研究

文章中における問題提起について述べた先行研究に西田 (1986)、樺島 (1980)、野村 (2000) がある。

野村 (同上) は問題提起文は情報を要求し、その次に来る文がパラグラフを開始させる効果を持っていると述べた。この野村の説は、例えば「①なぜ日本人はあまり休みをとらないのか。②ここでは、日本人の働き方について考察する」といった文章がある場合、①の問題提起文によって話題をとりあげ、②の文によってパラグラフを開始させていることになる。ここで問題提起文は、パラグラフ (=任意の話題にかかわるまとまりである部分) (同上; p 123) を開始する前に、その話題を読み手に導入する役割を持っていると言える。

次に西田 (1986)、樺島 (1980) は、問題提起文と、それに対応する解答について述べた。まず西田は文章中における疑問文 (=「問いかけの文」(p62)) によって行われる問題提起は、必ずその次に答えとなる解決・説明を要求すると述べた (西田 1986, p 62)。この問題提起とその答えの提示のし方についてパターンを示したのが樺島である。樺島はまず、「理解を高める型」というパターンを挙げた。これは文章全体のトピックを最初に提示し、すぐ後の文で答えを提示するというものである。また次に「問題解決の型」というパターンを挙げた。これは、問題提起の後にすぐ答えが用意されておらず、答えは「後回しに」されるものである。

以上のように、文章中における問題提起文は、その文章の流れに影響を与える機能を持ち、また問題提起文には、それに応じた解答が存在することがわかった。

3. 先行研究に関する問題点と本調査の目的

先行研究で疑問文には<質問>と<疑い>という機能があり、論理的な文章では<疑い>の機能から派生した<問題提起>の機能が用いられていることがわかった。また、文章中の<問題提起>は、必ずそれに対応する解答や説明がつき、またその<問題提起>と解答や解説との間には、いくつかの提示パターンがあることがわかった。しかしながら、実際に<問題提起>とその解答がどのような関係になっているのか、またどのような用法が多く用いられているのかについて、調査した先行研究はない。特に、<問題提起>は論文やレポート等で用いられる表現の一つであるが、それらの答え方まで含めた説明は、まだあまり調査されていないようである。

そこで本研究では、学術論文における問題提起疑問文で提示された問題が、どのように解答さ

れているのかについて調査する。

4. 調査方法

調査は次のように行った。

- 1) 疑問文全体の機能の割合について調査する。
- 2) 問題提起疑問文に対する答え方について調査する。
- 3) 問題提起疑問文の出現箇所について調査する
- 4) 1) ～ 3) の複合調査をする。

5. 結果

5.1. 疑問文の機能の割合

それではまず、学術論文全体において用いられている疑問文が<質問>機能であるか<疑い>機能であるのかについて調査した。それが以下の表1である。

表1 疑問文の機能

	用例数	割合
<質問>	46	40.7%
<疑い>	67	59.3%
合計	113	100.0%

表1は疑問文の機能について調査したものだが、疑問文全113例中、<質問>機能は46例、<疑い>機能は67例と、<疑い>機能のほうが多かった。<質問>機能46例は、すべて傾きをもつ疑問文であり、相手に直接問いかけるものではなかった。

この調査から学術論文内の疑問文は、<質問>機能中の、いわゆる傾きをもつ疑問文よりも<疑い>機能の疑問文のほうが多く出現していることがわかる。

5.2. 問題提起疑問文に対する答え方

次に、問題提起疑問文に対する答えがどのように出現しているのか調査した。樺島(1980)は、問題提起疑問文に対する答え方を、「直後に来るか」「直後に来ないか」という観点から調査した。本研究でも疑問文に対して、その答えが直後に出ているのか、または直後に出ていないかで分類した。本研究で述べる答えが直後に出現している例とは、次のような例を指す。

(4) これはパズルなのだろうか。これは必ずしもパズルではない。(経済学)

(5) 日本の場合は、アメリカタイプかイタリアタイプのどちらにより近いであろうか。筆者はどちらかといえばイタリアにより近いと考えている。(経済学)

(4)も(5)も、傍線部の疑問文に対して、その後続する文で答えを述べている。このように、明確に答えが疑問文の後に提示されている例を、「直後に答えが出ている例」として採用した。

一方、疑問文の直後に答えが出ない例は、次のような文である。

(6) 憑依現象について心理学的にはどのような理解が可能であろうか。2事例という限界はある

が、両事例の症状や経過、臨床像について心理学検査の所見と擦りあわせて論じることとする。(心理学)

(7) いったいなにが隠され、なにが歪められているのか。情報操作がおこなわれているこ

とを意識するにつれ、真相を知りたいという焦燥もますますつのる。(英文学)

(6)では「どのような理解が可能であろうか」という疑問に対して、その直後にはその問いに対する答えは書かれていない。また(7)も傍線部の疑問文に対して、その答えは直後に書かれていない。このような例を「直後に答えが出ていない例」として採用した。

以上の2種類の疑問文の答え方を調査した結果が、次の表2である。

表2 問題提起疑問文に対する答え方

答え方	用例数	割合
直後に答え	20	29.9%
直後に答えない	40	59.7%
疑問文が連続	5	7.5%
不明	2	3.0%
合計	67	100.0%

表2の「疑問文が連続」というのは、次のように疑問文の後に疑問文が連続している例をさす。

(8) 通常兵器ガヴァナンスが今後どのように発展していくのか。また、そうした発展が安全保障分野のグローバルガヴァナンスにいかなる影響を与えるのか。(政治学)

表2を見ると、疑問文の直後に答えが表れない場合は59.7%、疑問文の直後に答えが現れるのは29.9%となり、疑問文の直後に答えが表れない場合ほうが多いことがわかった。

5.3 問題提起疑問文の出現箇所

それでは、前節でみた直後に答えがある疑問文と直後に答えがない疑問文は、どのような場所で出現しているのか。次に1節の中でどの部分に出現しているのか見る。ここでいう節とは、1つのトピックとしてまとめられているものである。例えば次の(例)は、「新しいヨーロッパ」という大見出しのものと、「(1) 地域としての「ヨーロッパ」と、「(2) 「新しいヨーロッパ」の論理と構造」という2つの節が書かれている。この1節内において疑問文は「節の冒頭段落」、「節の中」、「節の最終段落」部分のどこに表れているのか見る。

(例) — 「新しいヨーロッパ」の展開 / (1) 地域としての「ヨーロッパ」

カーのヨーロッパ観は、同時代の国際関係をめぐる多様な問題を反映しながら動的に形作られた。それは特に、ヨーロッパを一つの地域として認識する過程、そしてその地域における多文化・多民族的な政治・経済単位の必要性および重要性を認識する過程から成り立っていた。

第一次世界大戦中に外交官としての第一歩を踏み出したカーのヨーロッパ観は、極めて限定されていた。… (途中略)

(2) 「新しいヨーロッパ」の論理と構造 大戦の激化を背景として、「新しいヨーロッパ」論は、多文化・多民族的な政治・経済単位の考察の段階に入る。・・・ (政治学)

表3 節内での問題提起疑問文の位置

	節の冒頭段落	節の中	節の最終段落	その他	合計
用例数	18	34	12	3	67
割合	26.9%	50.7%	17.9%	4.5%	100.0%

表3は問題提起疑問文全体の出現位置である。表3をみると、最も多く出現したのは「節の中」で34例、次に「節の冒頭段落」部分で18例、そして最も少なかったのは節の最終段落部分で12例となった。論理的なテキストで用いられる疑問文は問題提起機能があることは先の先行研究でも述べられていた。よって問題提起疑問文を位置させるのは節の冒頭段落のほうが多いと考えていたが、それよりも節の中に出現する疑問文のほうが多かった。

5.4 疑問文の出現箇所と答え方の関係

今までの調査を合わせて、問題提起疑問文の出現位置と、その答え方を合わせてみた結果が、表4である。

表4 問題提起疑問文の解答パターンごとの出現位置

	節の冒頭段落	節の中	節の最終段落	その他	合計
直後に答え	2	17	1	0	20
	10.0%	85.0%	5.0%	0.0%	100.0%
直後に答えない	15	14	8	3	40
	38.5%	33.3%	20.5%	7.7%	100.0%
疑問文が連続	1	2	1	0	4
	25.0%	50.0%	25.0%	0.0%	100.0%
不明	0	1	2	0	3
	0.0%	33.3%	66.7%	0.0%	100.0%

表4を見ると、直後に答えがある疑問文は全20例あったが、そのうち17例が節の中であり、この答え方をする疑問文はほとんどが節の中にあることがわかった。一方、直後に答えない疑問文の場合は、「節の冒頭段落」と「節の中」の両箇所に多く出現していることがわかった。

このことから、直後に答えがある疑問文は「節の中」にほとんど限定されているが、直後に答えない疑問文は、「節の中」のみならず「節の冒頭段落」にもあるので、比較すると用例数が多くなっていることがわかった。

6. 考察

次に直後に答えない問題提起疑問文の解答パターンと、直後に答えがある問題提起疑問文の解答パターンが実際にどのように用いられているのか概観し、文章中における問題提起疑問文の用法について考察する。

6.1 直後に答えがある問題提起疑問文の用法

まず直後に答えがある問題提起疑問文は節の中に出現するものが最も多かったが、これらの例

は次のようなものである。

- (9) しかし、三浦半島の繊維土器は、繊維を多量に混入する代わりに砂礫を減じているので、相対的に非繊維の土器よりも軽いといえなくはない。繊維混入の意図が、より文化的・宗教的なものだと考えた場合はどうだろうか。繊維に装飾効果を求めるという(D1)の仮説は、外面から見える繊維の痕跡を条痕やナデによって消そうという意識が認められることから、棄却するのが妥当である。また、(D2)は(*省略)今回は保留する。(考古学)
- (10) ハンバートは自分のニンフェット幻想を求めるばかりで、ロリータが何者なのかということに思いをめぐらせないが、そもそもロリータの出自はどこなのだろうか。ナボコフは彼女の血統について、あとがきで“a dash of Irish blood” (312)と述べていた。ロリータの父親ハロルド(Harold Haze)がアイルランド系であることはいくつかの証拠が作中にあり明らかだが6)、母親シャーロットの出身はいったいどこなのだろうか。それについてナボコフはあとがきをロシア語訳した際に「ドイツとアイルランドの血の混合」(378)という付け足しをおこなっている。(英文学)
- (11) CBTを用いたセラピーのなかで、「人を信じられるようになりたい」というクライエントの一つの主訴は改善された。この際、A子が述べる「信じることができない人」とは誰を指しているのだろうか。もちろん、A子は男性から暴力を受け続ける被害に遭ったため、当然男性全般は“信じられない”対象であったといえる。しかしそれだけでなく、援助する側にある人たち、つまり、家族、主治医、セラピストも“信じられない”対象であったと思われる。A子は援助者らをまったく信用していない訳ではなかったが、自分のことをすべて受け入れてもらえるのかという不安から、完全に信頼することはできないでいた。(心理学)
- (12) このサイズ変数を用いて、(*中略)有意差がみられた。なぜ報告書で打製石斧と認定された石器の大半を筆者は横刃型石器と認定したのか。その理由は、出土打製石器に認められた摩耗痕跡を、報告者が「使用痕」としたのに対し、筆者はその一部を「風化浸食痕」とみたという違いに集約される。本資料中、主に頁岩壘円礫表面にみられる筋状痕跡は、(1)条線が非常に細かく浅く、長く連続したり、礫面の凹凸に沿って滑らかな曲線を描いたりする(図5)。(考古学)

上の4用例は、いずれも直後に答えがあると考えられるが、まずその特徴としては、答え方のバリエーションがいくつかあることである。今回観察された中では、一つ目は、(9)や(11)の波線部のように疑問文の後に「～と言える」「～妥当である」といった論者の判断を表すものである。二つ目としては、(12)のように疑問文の後に「その理由は～である」といったメタ言語表現を用いるもの、そして3つ目としては、(10)のように他資料からの情報を載せるものである。

また特徴のもう一つとして、問題提起→答え、という1つの形式でも、それが文章中に与える影響の違いである。(9)や(10)は、問題提起→答え、という短い展開となっている。例えば(9)は「繊維混入の意図」について、「文化的・宗教的なものだと考えた場合はどうだろうか」という問題提起を呈するが、それに対して「棄却するのが妥当である」と答え、次の話題に移っている。ま

た(10)も、「ロリータの出自はどこなのか」という問いに対して、ナボコフは「“a dash of Irish blood” (312)と述べていた」という答えを出し、次に今度は母親の出自に関する問いを出している。このように、疑問文で欠けている情報を答えによって補う、というパターンが見られた。

(11)や(12)は、1つの疑問文の後にすぐ答えが書かれているが、答えただけで話が終わらず、答えの後にもその答えを展開させるような話が続いている。例えば(11)では、疑問文で「A子が述べる信じられない人は誰か」という問題提起が提出される。それに対して次の文では、「男性全般」が信じられない対象であることが述べられる。しかし、それでは終わりではなく、実は援助する人たちのことも信じられていない、という話が続く。また(12)では、「なぜ筆者は石器に対して報告書とは異なる認定をしたのか」という内容の疑問文に対して、「その理由は～に集約される」という答えが出される。そして、その詳細な理由に関して後文に続く。このように、(11)や(12)は、問題提起疑問文が「問題提起→答え」だけではなく、「問題提起→答え→答え」に関する話の展開、という構造になっている。

以上のように、直後に答えがある問題提起疑問文は節の中で用いられるが、その答え方にはバリエーションが見られた。また後文の談話の展開に影響を与えているものもあった。

6.2. 直後に答えがない問題提起疑問文の用法

直後に答えがない問題提起疑問文は節の冒頭段落に出現するものと、節の中に出現するものがあった。ここではそれぞれにおける用法の特徴を記す。

6.2.1. 節の冒頭段落で用いられる場合

節の冒頭段落部分に出現する疑問文の問題提起において特徴的なのは、次の例のように疑問文の後に「論をどのように論述していくか」といったメタ言語表現文が用いられることである。

(13)では、「私」を詩人に敵対する説教師的ペルソナと捉えたとき、“The World”の最終連はどのような意味を帯びてくるのだろうか。以下、最終連は省略をせず順次見ていくことにする。(英文学)

(14)ではなぜ1990年代後半にM2の実体経済に対する予測力が消滅したのだろうか。この問いに答えるため、まずM2の構成要素の中でどの部分が予測力を喪失させたのかを検証する。(経済学)

(13)は英文学論文におけるある章の冒頭部分であり、これからどのように論を進めるのかについては「以下、～見ていくこととする」という文の後に書かれている。また(14)は「M2の予測力はなぜ～消滅したのか」という経済学論文のある節であるが、後文ではこの問いに答えるためにどのような論の展開を行うのが書かれている。この例のように、節の冒頭段落において問題提起を行い、その後の論の述べ方の詳細を後文で述べるという用法が見られた。これらの例は、野村(2000)で述べられていた「情報を要求する文」(同上：p133-134)であると言える。野村は、問題提起部分を「情報を要求する文」とし、その後続く論の述べ方を示した部分を「パラ

グラフを開始させる効果」をもつ部分とした。

しかし次のように、問題提起の後にメタ言語表現文を示さずに、すぐに話題が続くこともあった。

- (15) 4. 『荒地』における群衆 エリオットは「ロイド」論において（*省略）受身的な集団が発生することを嘆いていた。では、「ロイド」論で語られた「原形質の状態」と『荒地』は、どのように関わっているのか。

『荒地』には草稿も含め、群衆の姿がたびたび描かれている。第1部「死者の埋葬」“The Burial of the Dead”には、（*省略）“crowds of people, walking round in a ring” (1.56)の姿がある。（*省略）つまり、（*省略）『荒地』第5部で描かれる群衆は、「ロイド」論で語られた“protoplasm”の状態に陥った人々と同様に、原始の状態へと立ち戻っているのである。（英文学）

(15)はこの疑問文に入る前まで、T. S. エリオットの「マリー・ロイド論」における「protoplasm」、つまり「原形質」の状態とは何かについて述べ、この段落から同じ作者の「荒地」という作品における原形質の状態について論じ始めている。そして、この疑問文において「『原形質の状態』と『荒地』は、どのように関わっているのか」という疑問文の後、まずは「荒地」の群衆に関して話題が始まり、次段落まで話が続き、その終わりに「つまり、『荒地』第5部で描かれる群衆は、…」という文で、最初の疑問文に対する答えを出している。

これらの用例は、問題提起疑問文が節全体の問題提起として用いられる場合であると言える。

6.2.2 節の中に用いられる場合

それでは次に、節の中に用いられている問題提起疑問文の例を出す。

- (16) ウィルソン (Harold Wilson) 政権が欧州での影響力拡大のため、関係改善に向けて動き出した国が、（*中略）西ドイツであった。アデナウアー (Konrad Adenauer) 陣により、英独関係を改善させる機も熟していた(5)。

イギリスは何故、英独関係を重視したのだろうか。西ドイツは冷戦による欧州の分断を象徴する国家であり、「鉄のカーテン」をすぐ東側に臨む冷戦の前哨国家であった。その西ドイツは英ソ関係、英米関係の中心に位置する要でもあった。ドイツ問題は東西間交渉の最重要課題であり、（*省略）ソ連の主要交渉相手国である西ドイツに対する影響力を高めることで、冷戦にも効果的に関与できる。（政治学）

- (17) これらの結果から、M1 部分ではなく定期性預金の動きが M2 の役割低下の主要因であることが判明した。

それでは、定期性預金が予測力を喪失した理由とは何なのだろうか。一般に、M2 の変動と銀行貸出の動きとは密接な関わりがあることが指摘される。もしそれが事実なら、銀行貸出の実体経済への予測力を調べることで、われわれは新たな示唆を得るかもしれない。（経済学）

(16)の例の問題提起疑問文が用いられる前までは、「ウィルソン政権が西ドイツを重視していた」ことが書かれており、疑問文で「なぜ」重視されているのか、問題提起によって前文までの事実に対する「理由」に焦点が当てられ、問題提起以降、その理由を解明する説明がなされている。また(17)では、まず「定期性預金の動きが M2 の役割低下の主要因であることが判明した。」という事実が述べられ、問題提起文によって、その事実が起きた「理由」に焦点をあて、その理由を解明する説明がなされている。

これらは、問題提起疑問文を節の中で用いることによって、今までの議論に関してはいるが、新たな視点からの議論を始めるきっかけとなっていることが分かる。

7. まとめ

以上の研究から、以下のことがわかった。

- 1) 学術論文内における疑問文の機能は、<質問>よりも<疑い>が多い。いわゆる傾きのある疑問文よりも多く用いられている。
- 2) 問題提起疑問文に対する答えは、直後に出る場合よりも直後に出ない場合のほうが多い。
- 3) 直後に答えがある問題提起疑問文は「節の中」に出現する場合がほとんどであるが、直後に答えがない問題提起疑問文は、「節の中」のみならず「節の冒頭段落」にも出現している。
- 4) 「節の中」に出現する直後に答えがある問題提起疑問文は、問題提起→答え、という短い展開となっているものや、また、疑問文の後にすぐ答えが書かれているが、答えただけで話が終わらず、答えの後にもその答えを展開させるような話が続いている場合がある。
- 5) 「節の冒頭段落」で用いられる直後に答えがない疑問文は、節全体への問いかけは、問題提起後にくこの論は次にこうなる>といったメタ言語表現と、それを伴わずに話題が始まる場合がある。
- 6) 「節の中」で用いられる直後に答えがない疑問文は、問題提起疑問文を節の中で用いることによって、今まで述べてきた議論に関してはいるが、新たな視点からの議論を始めるきっかけとなっていることが分かる。

以上のことをまとめると、学術論文における問題提起疑問文は、①問題提起→答え、と解答がすぐさま出てくる問題提起疑問文（使用箇所：節の中）、②問題提起→答え（話題開始のきっかけ）→話題／問題提起（話題開始のきっかけ）→話題、とそれまでの述べられてきた議論に関係させつつ、新たな視点から議論を始める働きをする問題提起疑問文、③節の冒頭段落においてその節全体への問題提起を行う問題提起疑問文、といくつかの用法があるのではないかと考えられた。

[参考文献]

安達太郎(1999)『日本語疑問文における判断の諸相』くろしお出版

- 樺島忠夫（1980）『講談社現代新書 文章構成法』講談社
- 田野村忠温（1988）「否定疑問文小考」『国語学』152, 123-109
- 西田直敏（1986）「文の連節について」『日本語学』5-10, 57-66
- 野村眞木夫（2000）『日本語のテキスト—関係・効果・様相—』ひつじ書房
- 宮崎和人・安達太郎・野田春美・高梨信乃(2002)『新日本語文法選書4モダリティ』くろしお出版
- 宮崎和人（2005）『現代日本語の疑問表現—疑いと確認要求—』ひつじ書房